

砥礪

はばたく未来へ
大学院スタート！

Contents

- 2 学長の挨拶
- 3 保健科学部長の挨拶
- 4 看護学科長の挨拶
- 5 臨床検査学科長の挨拶
- 6 地域交流センター長の挨拶
- 6 図書館長からのメッセージ
- 7 学生部長の挨拶
- 8 平成 26 年 4 月より
愛媛県立医療技術大学大学院を
開設しました
- 10 研究活動紹介
- 11 講座紹介
- 13 授業 PR
- 14 地域に開かれた大学づくり
地域交流センター事業
- 15 図書館紹介
- 16 インフォメーション



SHIREI

2014. July

10号

学長の挨拶

学 長

橋本 公二 *Koji Hashimoto*



本学は、昭和63年に開学した愛媛県立医療技術短期大学を前身とし、平成16年に開学した現在発展途上にある大学です。平成22年4月から公立大学法人愛媛県立医療技術大学となり、現在5年目を迎えます。法人化によって、大学の自己責任に基づいた裁量権が大きくなった結果、大学らしい自由度を発揮した展開が期待でき、活気あふれる大学を目指して様々な改革を進めています。

大学の第一使命である学生教育には既に定評があり、社会で活躍している卒業生は3,200名を越えています。平成26年3月の保健科学部および助産学専攻科の卒業生は、看護師98.4%、保健師95.2%、助産師100%、臨床検査技師100%という素晴らしい国家試験合格率を達成し、就職率100%で巣立って行きました。平成24年4月からは、学部の上に1年制の助産学専攻科を10名の定員で発足させ、平成27年度からは定員を15名に増員し、県内唯一の助産師養成課程をさらに充実させています。さらに平成25年4月からは学生定員を20名（看護学科15名、臨床検査学科5名）増やして、地域や国内の医療職不足に応えようとしています。また、平成26年4月からは待望の大学院（看護学専攻5名、医療技術科学専攻3名）を開設し、一歩進んだ先進医療教育や医療職のキャリアアップへの貢献を目指しています。本学の特色である地域交流センターは、大学全体の協力のもとに、多くの地域交流企画に加えて、専門職や一般人を対象とした教育

活動、医療・介護・行政機関との連携・協力を尽力し、地域に貢献する大学としての使命を存分に果たしています。

大学のもう一つの使命である研究に関しては、法人化前の本学は研究環境が非常に不十分で、教員の研究能力を発揮することが難しい状況にありました。法人化によって大学の自由裁量権が大きくなったことを受けて、学内研究基盤の整備に力を注いでいます。平成24年度からの3年計画で、約7,000万円をかけて教育・研究機器や設備の更新・充実をはかっています。同時に、教員個々への基盤研究費や重点研究費の増額をはかり、第一期中期計画終了までには基盤整備に目処をつけたいと考えております。こうした中で研究は徐々に活発化し、法人化前には毎年数件程度であった文部科学省等の科学研究費採択件数は、平成24年度は13件、25年度は16件、26年度は14件と急上昇していますし、平成25年度には国際学会の国際賞を受賞する教員が出たことは、本学の研究推進にとって大きな励みになりました。また、大学院が設置されたことにより、研究の進展はさらに加速され、学外機関との連携を含めた活発な研究が展開できると期待されています。

このように本学は、法人化による自由化を契機に進化し、大きく発展しつつあります。今後とも各方面のご理解とご支援をどうぞよろしくお願い申し上げます。

開学10年の 節目を迎えて

保健科学部長
兼 助産学専攻科長
兼 保健医療学研究科長

宮内 清子 Kiyoko Miyauchi

本年4月、愛媛県立医療技術大学は、開学から10年の節目を迎えました。

16年に及ぶ短大の歴史を礎に大学としての歩を刻み始めて満10年、多くの関係者のご協力を得、教職員・学生が力を合わせて創ってきた道のりは、大学としての使命や本学に求められる社会の期待を意識しながら只管に歩んできた年月であり足跡でもあるように思います。

節目の年に当たり、本学の使命である教育の側面から特筆すべきことのいくつかを紹介します。

学部教育の充実を目指しての「カリキュラム改正」

本学の教育理念である「豊かな人間性と高度の専門的な知識・技術を有する実践者の育成」を目指して、全教員が教育目標や卒業時の学生像を確認しながら教育活動を展開してきましたが、保健医療福祉を取り巻く社会の変化や医療の進歩が著しい中、社会のニーズに対応できる専門職教育の質保証を目指して、平成21年度・平成24年度にカリキュラム改正を行い、教育内容の充実を図りました。専門的知識・技術に基づく実践力の強化はもとより、教養教育の充実、関係職種との協調・共働に係る科目の見直しなどを行いました。さらに教育活動の点検評価を重ね、本学の使命である専門職教育の充実を目指して全力投球していきたいと考えています。

助産学専攻科の開設、そして基盤強化

平成24年4月、大学教育に上乘せする教育コースとして「助産学専攻科」を開設しました。開学当初は国の方針もあって看護学科4年間の中で選択制による教育を実施してきましたが、「保健師助産師看護師法」の一部改正により教育年限が6カ月から1年に延長されたこと、全国的な上乘せ教育の動きを味方に、県内唯一の助産師教育機関として専攻科を設置することができました。

平成27年度からは定員15名の教育を軌道に乗せる予定ですが、近年の少子化の影響を受けて臨地実習施設の



安定確保が課題であり、人間性・専門性を兼ね備えた助産師の育成に向けて、関係機関との協議を重ね、教育体制の整備を図って参りたいと思います。

大学院「保健医療学研究科」の開設

本年4月、2年余の準備期間を経て念願の大学院「保健医療学研究科」を開設することができました。この間、関係団体・関係者の方々や県内各地の看護職・臨床検査技師の方々に多くのご協力をいただきました。設置認可に至るまでにはいくつかのハードルもありましたが、多くの方々の期待の声を力に、教職員一丸となって目標に邁進することができたと心から感謝しています。

保健医療学研究科は、「地域の保健医療を支える」を基本理念に、「保健医療の分野に関してより高度で専門的な学術理論及び実践能力を修得し、総合的な判断能力・指導力・教育力をもって高度専門職業人として力を発揮できる人材の育成」を目的としており、実践の場で活動する社会人が在職のまま学ぶことのできる昼夜開講制や長期履修制度を設けています。

定員は8名（看護学専攻5名・医療技術科学専攻3名）で、第1期生は10名（看護学専攻7名、医療技術科学専攻3名）、いずれも社会人で、医療機関・検査機関・保健所や市町・教育機関など背景は多様ですが、勤務時間を調整して通学し勉強されています。教員側も、夜間や土曜日開講に自身の計画を合わせ、学生の熱意に刺激を受けながら授業を進めていますが、個々人の学習・研究目標を大切に、高度専門職業人として巣立つ日まで共に歩を進めたいと考えます。

以上、道のりの一端を紹介しましたが、次の10年に向かって、学部・専攻科・大学院の教育をさらに充実させるため、教員自身も教育力・研究力の向上に努力して参りますので、皆様のお力添えをお願いいたします。



看護学科長の 挨拶

看護学科長

中西 純子

Jyunko Nakanishi

私、中西は平成26年4月から引き続き3期6年目の看護学科長を務めることとなりました。微力ながら教職員、学生をはじめ、皆様の力をお借りして看護学科を盛り立てていきたいと考えておりますので、どうかよろしくお願いいたします。

昨年は、大学は大学院開設という大きな課題に取り組んだ1年でしたが、4月1日には無事10名

の大学院生を迎えスタートを切ることができました。大学院を担当する教員は、私を含め全員が学部との兼任です。大学院ができたことで、ステップアップを目指したい現役学生や卒業生が進学を希望する魅力ある大学としてさらに充実させていきたいと思います。

さて、看護学科は平成25年より看護師不足の背景や地元での進学、就業を促進するねらいから入学定員を1学年75名（平成24年までは60名）に増やしました。これまでの定員の1/4にあたる15名の増員で教室など環境面での窮屈さは否めませんが、学内は学生の熱気と活気にあふれ賑やかになりました。私たち教員は人数の増加によって教育の質の低下を招くことがないよう教育方法や教材の工夫に取り組んでいます。

ここで、少し、6月頃の各学年の学生の様子をご紹介します。

まず、1年生はやっと入学時の緊張もほぐれ、新しい生活や大学での勉強の仕方にも慣れ始めた頃です。それでもまだまだ高校生の初々しさを残し、すれ違う時にはにっこり微笑んでよく挨拶をしてくれます。

2年生はすっかり大学生活にも慣れ、サークルや自治会活動で中心になる学年です。時間割には臨床検査学科と合同で受講する医学的な専門基礎科目が格段に増えています。9月には初めての病院実習があるのですが、これに出るためには定められた科目の単位を取得していることが条件となるため学生は気の抜けない日々を過ごしています。

3年生は10月から約1年間続く学外実習にでるため、時間割には各看護学専門（老年看護学、小児看護学、地域看護学・・・など）の方法論を学ぶ授業がびっしり詰まっています。学ぶ内容がますます専門的に、かつ広範囲にわたってきて、課題に追われながらも学生の顔も引き締まってきたように感じます。

4年生はゴールデンウィーク明けから7月まで引き続き学外実習にでています。実習はすでに約2/3を終了していますから、いろいろな体験をせずいぶん大人びてきています。残りの実習と並行して卒業研究や就職活動にも取り組み始め、教員の研究室への出入りも頻繁になってきた頃です。

看護学科の学生はこうした4年間を過ごす中で成長を遂げていきますが、年齢の積み重ね以上に病院実習による体験が成長を後押ししています。大学には実習で担当させていただいた患者さんやご家族から学生宛に感謝の手紙が届くこともしばしばです。

志をもって入学してきた学生が人間としてもひとまわり成長し、看護の魅力をさらに体得して卒業していけるよう実習施設との連携・協働を強化し、教職員一同、今後とも力を尽くして参ります。



臨床検査学科長の 挨拶

臨床検査学科長

升野 博志

Hiroshi Masuno

医療技術は高度で精緻なテクノロジーへと変貌をとげつつありますが、近年の医学の潮流は治療医学から予防医学へ、さらには健康維持・増進を目指す方向へ向いております。健康維持・増進するためには疾病を早期発見することや健康状態を把握することが重要です。疾病の早期発見、健康状態の把握には迅速かつ正確な検査技術

が不可欠です。この検査は臨床検査と呼ばれ、生理機能検査、病理検査、血液検査、一般検査など多岐にわたっております。これらの検査を行うプロが臨床検査技師です。医療現場では医師、看護師、薬剤師などといった多くの医療スタッフと連携するチーム医療が展開されております。その中で種々の検査データを提供する臨床検査技師は治療・看護の方向性を決める上でも重要な位置を占めております。本学科ではこれらのニーズに応えることができるように、医療の基礎知識はもとより、臨床検査の基礎となる自然科学や生命科学などの知識、さらに高度で専門的な知識および技術をもった臨床検査技師を養成します。

カリキュラムは臨床検査学科と看護学科が合同で学ぶ共通教育科目（教養科目・基礎科目）、臨床検査学科独自の専門基礎科目および専門科目から成り立っております。学生は4年間にこれらの教育を通して、幅広い知識・教養をもとに医学検査の対象となる人を総合的に理解し、臨床検査学という学問に対する深い知識と技術を習得します。また、2年次には中規模病院、3年次には保健所など病院以外の施設、4年次には大規模病院でそれぞれ臨地実習を行います。この3度の臨地実習を通して医療現場を体験し、医療技術者としての心構えを身につけます。

本学科は基礎検査学講座と生体情報学講座の2講座から成り立っており、教育・研究に熱意のある総勢15名の教員で運営されています。学生数は1学年20名（平成25年度から25名）と少人数であり、教員は一人一人の学生を理解して4年間の教育にあたっております。さらに、本年度からは大学院が新設され、臨床検査を中心とする医療技術科学分野において、より高度な知識や技術を身につけることや研究の楽しさや難しさも学ぶことができます。

今日、臨床検査技師が活躍する職場は病院の検査室だけにとどまらず、検診・検査センターでの仕事、官公庁での保健衛生に関する仕事、体外受精など生殖補助医療の仕事、製薬会社での医療品に関する仕事など幅広い分野にまで及んでいます。また、愛媛県下はもとより全国各地からも求人がきています。医学検査のプロを目指す皆さん、是非、本学で私たちと一緒に学びましょう。

最後に、本学科は医学検査とそれに関連した幅広い分野の発展・向上に寄与できる学究的な態度を身につけた学生を育成して参りますので、皆様からの温かいご協力とご支援をお願い申し上げます。



地域交流センター長の 挨拶

地域交流センター長

豊田 ゆかり

Yukari Toyota

～地域に開かれた大学を目指している活動拠点としての
地域交流センター～

愛媛県立医療技術大学地域交流センターは、大学の開学と同時に平成16年4月に設置し、県民の保健・医療・福祉の増進に寄与することを目的に活動し本年で11年目を迎えています。地域交流センターはこの目的実現にむけ、①人材育成機能、②調査研究機能、③相談支援機能、④情報発信機能の4つの機能をもち、本学の施設、設備と教職員、学生ボランティア等の人材を活用した事業を展開しています。これまでの活動の中で特に学生が主体的に活動した、①人材育成機能の中の活動を紹介します。

愛媛で開催されて3年目を迎え松山市城山公園で開かれた、がん制圧への願いと絆を深め合うリレーフォーライフ in えひめサポーター活動があります。この活動に第一回目から本学教職員、学生は参加しています。学生ボランティアは、本部実行委員、学内実行委員として、活動前から積極的に本部との打ち合わせに参加し活動しています。今では本学学生ボランティアは、リレーフォーライフ in えひめには欠かせない重要な存在として位置付けています。また、地域の子育て支援団体の看護師・臨床検査技師のお仕事体験や育児支援活動への参加、教育委員会や高等学校への協力による高校生の理科実験教室にも学生は協力しています。その他子供から高齢者の催し物、障害者の運動会まで幅広く各種団体からボランティアの依頼があり、年々ボランティア参加する学生も増えています。学生達も地域の様々な人達と交流することで、地域の子育て事情や、高齢者、障害者の気持ちや関わり方を学習する機会にもなっています。

本センターは、地域の皆様や専門職の方々に活用されてこそ、設置目的を達成することができます。行政、学校、NPO法人、各種団体等の関係機関との連携を図り、学生達とともに県民の皆様に活用していただけるよう活動を続けて参ります。

図書館長からの メッセージ

図書館長

佐田 榮司

Eiji Sada

大学図書館の基本的機能は、学生の学習や大学が行う高等教育及び学術研究活動全般を支える重要な学術情報基盤の役割とされ、大学の教育研究活動にとって不可欠な総合的な機能を担う機関とされています。具体的には学習・教育・研究に必要な学術情報を収集し、利用者の希望に応じそれらを適切に提供することにあります。

本学図書館は学生の学習支援を最も重視し、法人化後開館時間の午後9時までの延長の試行を行ってきましたが、大学院が開設された本年度からは正式に午後9時までの開館延長とし、本学学生のみ対象ではありますが土曜日

の開館も行っています。さらに、学生の勉学、教育に重点を置いた選書をおこなってきました。その反映として、学生の図書離れが言われる昨今ではありますが、平成25年度の実績で1日平均160名以上の入館者があり、学生一人あたり平均35冊以上の貸し出しが行われております。

また、インターネットの普及に代表される学術情報の電子化の進展に伴い、本学でも学術論文に関するデータベースの積極的な充実、電子ジャーナルへのアクセスの確保にも取り組んでおります。さらに、地域・社会に開かれた図書館を目指し、平日の午前9時から午後6時30分には学外からの来館者も受け入れております。

一方、平成23年度から愛媛地区共同リポジトリ（大学や研究所などの学術機関による様々な知的生産物を電子化して公開するシステム）に参加し、本学における研究成果の積極的な情報発信を始めました。これにより、外部の方にも本学教員の研究内容を知っていただく機会が増えました。

大学図書館としての基本的機能は変わるものではありませんが、今後は学術情報の提供のみならず、学生・教員の学びの場、あるいは地域に開かれた図書館を目指して一層の努力をしてみたいです。



地域交流センター長
豊田 ゆかり



図書館長
佐田 榮司



学生部長
脇坂 浩之

学生部長の挨拶

学生部長

脇坂 浩之

Hiroyuki Wakisaka

本学には、医療の専門職を目指す保健科学部と助産学専攻科、さらに医療専門職がより高度の専門性を目指す保健医療学研究科（大学院）があり、それぞれの場で『専門職になる』『専門性を高める』という夢を実現するために、学生の皆さんが学生生活を送っています。その学生生活全般をサポートするために活動しているのが、私を含め約10名の教職員より構成される学生委員会です。学生委員会では、本学全教職員と協力して、また学外のサポートもいただきながら、より充実した学生生活のためのさまざまな支援を行っています。その活動内容は多岐に渡りますが、大別すると、学生生活そのものへの支援とサークル活動や自治会活動などの課外活動に対する支援があります。以下に、学生委員会の主な活動についてご紹介いたします。

1. オリエンテーション

新入生を中心に、全学生を対象としたオリエンテーションを実施し、学生生活関連の情報提供等の支援を行っています。

2. 一般健康診断・内科検診、保健室管理、感染管理

学生の健康維持のために、全学生を対象として健診等を実施するほか、保健室の維持管理やインフルエンザやノロウイルス等の感染予防啓発活動を行っています。さらに、実習時の安全対策として実習時感染防止マニュアルの作成も行っています。

3. 各種セミナー 学生生活に関連するさまざまなセミナーを開催しています。

交通安全講習会、犯罪被害防止教室、金銭感覚啓発セミナー、デートDV防止啓発講座、就職セミナー等を開催し、学生生活に関連したさまざまなトラブルの防止や就職支援活動を行っています。

4. 学生相談

学生のほとんどは、さまざまな悩みやトラブルをもちやすい多感な時期を本学で過ごすことになります。学生委員会では、それらの悩みに対して、積極的に相談に応じる体制をとっています。クラス顧問や学内相談員をはじめ、学外から心理カウンセラーの先生にも月2回来学していただいています。

5. 自治会活動支援

自治会運営への助言、自治会主催イベントへの参加・応援（学長杯争奪球技大会、医技大クリーンナップ大作戦）、学生祭、サークル活動への支援等を行っています。

6. 後援会

保護者の方々との情報共有や連携を通して、学生の皆さんが、より充実した学生生活を送れるよう支援を進めています。後援会総会や役員会への出席、後援会向けのキャンパスツアーや教員との交流会等も行っています。また、「キャンパスライフ」（学生委員会発行：年2回）を通じて、保護者の方々に大学の状況や取り組み、学生の状況等についてお知らせをしています。

7. その他

福利厚生の充実、奨学金申請、キャンパスの安全と美化の推進等に取り組んでいます。

以上、簡単ですが学生委員会の活動をご紹介いたしました。学生委員会では、学生の皆さんによりよい学びの場が提供できるよう、今後も活動の充実を図っていきたいと考えています。

愛媛県立医療技術大学大学院を開設しました

1. アドミッションポリシー

保健医療学研究科の理念・目的は、看護並びに臨床検査分野の実践者及び大学教育修了者が、修士課程での学究を通してさらに卓越した実践能力・リーダーシップ能力を身につけ、高度専門職業人として保健医療福祉の分野において高度な専門職、教育・研究者として活躍できることを目指しての人材育成です。

2. 研究科の教育目標

- (1) 保健医療機関、地域、行政、教育等の場において、多くの関係職種と連携・協働しながら、リーダー・管理者として中心的な役割を担って活動できる人材を育成します。
- (2) 実践の現場で展開されている諸現象について科学的に検証しエビデンスを明確にするとともに、学術研究を通してそれらをさらに深化・発展させ、その成果を実践に適用することのできる人材を育成します。
- (3) 地域社会で生じている保健医療福祉の諸課題について、その内容を学問的・体系的に俯瞰するとともに、背景にある原因や要因、解決策について解明し、関係者や社会への発信、諸制度や地域システム改善の提言、関係職種との協働活動が展開できる人材を育成します。

3. 募集人員

研究科名	専攻名	募集人員	学位
保健医療学研究科 (修士課程)	看護学専攻	5名	修士(看護学)
	医療技術科学専攻	3名	修士(医療技術科学)

4. 初年度納付金

- (1) 入学金 282,000円(県内居住者)又は423,000円(県外居住者)
- (2) 授業料 年額535,800円(前期分4月納付 後期分10月納付)

5. 教育課程(カリキュラムポリシー)

本研究科は、高度専門職業人として種々の実践の場でリーダー・管理者・教育者などの役割を発揮するために、地域で生活する人々の保健医療福祉全般にわたる現状や諸課題を広く理解し、総合的な判断力・調整力をもって看護、医療技術科学それぞれの分野において高い専門性を発揮できる人材の育成をねらいとしています。このねらいを具現化するため、教育課程編成においては、まず、保健医療分野の高度専門職業人として、地域の保健医療に係る諸現象や他職種を理解し、視野の広い判断能力・指導力・管理能力・教育力等を身につける上で必要と考える教育内容を研究科としての「共通科目」として配置しました。

そして、これらの科目における協働学習や討論を通して培った相互理解の深まりや視野の拡がり、保健医療や地域の人々への貢献における各々の分野の役割の再認識などを基盤に、さらにその上に、看護学・医療技術科学の専門性を追求していくことを目指して、各専攻の専門科目として「専門共通」「専門分野」を設けました。「共通科目」から「専門科目」へと段階的学修を積み重ね、選択した専門分野の学修の集大成として特別研究へと発展させる教育課程としています。

保健医療学研究科の教育課程の構造



分野紹介

看護学専攻 臨床看護実践分野



成熟期・慢性看護学領域
中西 純子 教授

臨床看護実践分野には、育成支援看護学と成熟期・慢性看護学があります。成熟期・慢性看護学は糖尿病や腎臓病等に代表される自己管理が病状を左右する疾患を患う人や脳卒中等のように急性期を脱した後、新たに生活を立て直していくことが求められる人、がんで抗がん剤治療を繰り返す人、認知症や進行性の難病のように徐々に進んでいく機能低下に向き合いながら生きる人など、慢性的な経過をたどる人々とその家族への看護を追究する分野です。慢性看護は治癒を目指

すのではなく、長期にわたって疾患をコントロールする、あるいは疾患とともに共存していく術をその人自身が身に付けていくことを手助けします。それ故、慢性看護の場合は病室よりも、むしろ人々の暮らしのなかや外来、地域の診療所、施設などが中心になります。慢性期の主人公は患者さんご自身です。慢性看護学分野には、本年度2人の経験豊かな看護師が入学しました。院生とともに主人公とそれを支えるご家族の力を最大限に引き出す看護を目指します。

看護学専攻 地域健康生活支援分野



精神看護学領域
越智 百枝 教授

こんにちは。地域健康生活支援分野の越智です。14年ぶりに本学に戻ってきました。

地域健康生活支援分野には、地域看護学（担当：野村美千江、宮内清子、田中美延里）と精神看護学（担当：越智百枝）があります。

地域看護学では、集団・組織・地域の顕在的・潜在的健康課題をアセスメントし、解決・改善するために、より効果的な支援方法を探究します。また、地域看護管理において重要な、健康危機管理と人材育成について学び、地域看護実践リーダーに求められる役割と課題を探究

します。

精神看護学では、人は自身を最もよく知り、セルフケアできる存在であること、また、病気をきっかけに、より高いレベルへの成長・発達を遂げるという視点から対象を理解し、対象及びその家族が病気や障害を持ちながら生活するのみでなく、人として成長・発達するための効果的な支援を探究します。

日頃の活動を振り返り、課題を明確にし、解決するための学術理論や実践能力、研究能力を修得したいと思われる方を心からお待ちしています。

看護学専攻 看護教育分野



看護教育学領域
野本 百合子 教授
(前列、中央)

看護教育学とは「看護学各領域の教育に共通して普遍的に存在する要素を研究対象として、看護学生を含む看護職者個々人の発達の支援を通して看護の対象に質の高い看護を提供することを目指す学問」です。看護教育領域は看護を実践する人の職業人としての発達に焦点を当てて研究を進めています。どれほど医療現場の環境が整備されても、そこで実践する看護職者が、根拠に基づいて適切に判断し行動することができなければ、人々に質の高い看護を提供することはできません。看護教育分野の研究課題は、人々に質の高い看護を提供するために、看護学生を含む看護職者個々の職業的な発達を支援するための研究成果を産出することです。看護職者の職業的な発達を支援する前提には、成人を対象とする教育の特徴を知ることが重要であり、成人教育の基礎的

な知識を基盤に看護職者の教育を考えていきます。

具体的な内容には、教育の対象理解や教育方法の開発、教育に活用できる看護技術の科学的根拠の解明等が含まれます。看護基礎教育だけでなく、看護継続教育も含む専門職者の教育全般を研究領域としています。

平成26年度は、看護基礎教育課程の教育や院内の看護職者教育に携わったりしている学生3名がそれぞれの実践領域に在職のまま入学してきました。それぞれの実践の場に生じている問題現象や課題は、何が根本的な原因なのか、何を明らかにすると問題や課題を克服することができるのか等を検討し、実践現場の改革に活用することができるよう研究成果の発信を進めています。

医療技術科学専攻 病因解析分野



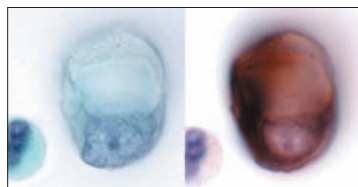
組織病理検査学領域
則松 良明 教授

医療技術科学専攻病因解析分野は、遺伝子生命科学（多細胞生物の構造と機能に主要な責任を持つエピジェネティクスの変化とヒト疾患との関連等）、分子細胞生物学（生体レベルから分子レベルにおける肥満及び脂質異常症の発症メカニズム等）、細胞・組織病理検査学（形態学および分子病理学的観点から疾患の疾病の本態を捉える等）について深く学習します。

研究面においては、ヒト細胞の老化と不死化の遺伝子機構、細胞分化とエピジェネティクス、肥満・脂質異常症の発症と環境ホルモンとの関連、各種薬剤の骨肉腫転移抑制のメカニズム、種々の臓器での癌およびその前癌病変における細胞診断基準の策定、尿中に出現する細胞と各種糸球体腎炎の関連性など多様なテーマについて取り組みます。

IgA腎症の患者尿中に出現したポドサイト

ポドサイトは通常の染色（写真左、パバニコロウ染色）では形態学的特徴に乏しく、同定困難であるが、WT1タンパクが細胞質に陽性所見（写真右、免疫細胞化学染色）を示すことを証明した。我々はこのポドサイトを尿中で検出することで、安全かつ安価に糸球体腎炎のスクリーニングや経過観察を行える新しい検査方法を開発した。



看護学科

徳永 なみじ 講師

タオルケットによる身体保護の緊張緩和効果の検証

現在の研究活動は、主として看護技術のエビデンスの探究をテーマとしています。看護のエビデンスに関する研究は徐々に進んでいるものの、まだ経験的で未検証な部分を残しています。本学の目指す、質の高い看護実践者の育成を実現するためには、さらなる研究成果の創出と、教育実践への活用が求められます。研究によって解明される看護のエビデンスは、高度で複雑な看護技術のみに求められるものではなく、基礎的な看護技術にも必要です。なぜなら、基礎的な看護技術の根拠が解明され、より確実な援助方法が明らかになることは、領域を超えた看護の質向上につながり、臨床への波及効果が大きいと考えるからです。

現在、心拍変動解析による自律神経活性の測定と心理尺度を組み合わせた実験研究により、心理的緊張を緩和させる効果的な援助方法の開発に取り組んでいます。自律神経には、交感神経と副交感神経の2つがあり、これらがほとんどの臓器を拮抗支配することで生体反応を調節し、恒常性の維持に貢献しています。交感神経は、活動時や緊張時に優位になり、副交感神経は安静時やリラックス時に優位になることがすでに知られています。

<研究紹介>

清拭などの看護援助は、プライバシー保護や保温のために、タオルケットで患者の身体を覆いながら実施します。このタオルケットに着目し、緊張緩和効果を検証しました。その結果、安静臥床中にタオルケットを掛けると、掛けないときよりも副交感神経活性が維持され、その後、掛けていたタオルケットを取ると、全く掛けていないときよりも副交感神経活性が有意に減衰することがわかりました。つまり、タオルケットで覆うことは、緊張が緩和した状態を維持する効果があることがわかりました。また、掛けているタオルケットを取るときには、引き起こされる緊張感への配慮（言葉かけや説明）が必要であることが示されました。



臨床検査学科

高田 智世 講師

肥満を改善する物質による骨代謝へ影響についての研究

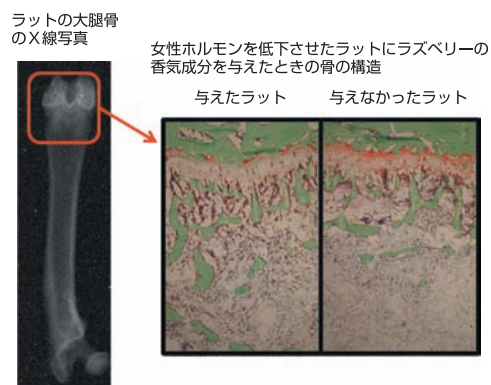
「骨そしょう症」という骨がもろくなり、骨折しやすくなる病気の名前を聞いたことがあると思います。高齢の男性や閉経後の女性に多いのですが、生活習慣の影響もあることから若い人でも過度のダイエットや運動不足でも起きやすくなると言われています。

骨を構成する細胞は、古い骨を壊して吸収する破骨細胞と、その場所に新しい骨を作る骨芽細胞から構成され、両者がバランスよく協調して骨量が保たれます。これを骨代謝といいます。このバランスが崩れると骨細胞が少なくなり、骨には脂肪細胞が増え、骨量低下が起きます。

骨量低下を防ぐには、骨代謝のバランスを正常に保つことが大切ですが、骨代謝は脂肪代謝と密接な関係があるのではないかとされています。今まで報告された論文では、脂肪細胞から分泌される生理活性物質が骨量の制御に関与していることや、最近では骨細胞も脂肪代謝を制御しているのではないかとされています。また、共通の細胞（特定の機能をもっていない未熟な細胞）から骨芽細胞や脂肪細胞になることもよく知られています。

以前、本学の学生を対象に過去から現在までの食習慣や運動習慣、現在の体格と骨量の関係を何年間にわたり調査したことがあります。その際に、体格や体脂肪が骨量と関係していることに興味を持ちました。そこで、

ラズベリーの香気成分が肥満を抑える作用をもつことから、これを使って骨代謝にどのような影響があるか細胞や動物実験によって研究しています。その結果、細胞を使った実験では骨の形成を促す作用があることがわかりました。また、女性ホルモンを低下させたラットの動物実験では、閉経後の骨量低下を予防する可能性があることを示唆する結果が得られました。まだ、ヒトでの効果はわかりませんが、肥満も様々な病気を引き起こすため、肥満を抑制しながら骨量低下も予防できるようになればと考え、このメカニズムを検討しています。



講座紹介

看護学科 母性・小児看護学講座

— 女性の健康・妊娠・出産・子供の育ちと家族支援の看護を教授する講座 —

母性・小児看護学講座は、小児看護学分野3名、母性看護学分野・助産学分野の7名、の3分野、計10名の教員で構成しています。

小児看護学分野では、成長・発達する子供の健康状態や病気の状況に応じた看護、さらに家族を含めた支援を中心とした内容です。小児看護学分野の教員3名は保健師・看護師として保健所・病院・保育所で培った経験を活かし、子供と家族の看護を教授しています。

母性看護学分野は、母性看護学・助産学の2分野の構成です。母性看護学では、女性の健康・妊娠・出産に関係する看護を教授しています。

助産学分野は、愛媛県内唯一の助産師国家試験受験資格が得られる助産学専攻科の教育を行っています。助産学専攻科は、看護系大学卒業後さらに1年間、助産師の活動に関する内容を学習します。助産学の学習をサポートする母性看護学・助産学の教員7名は、病院・助産所・国際協力等助産師としてさまざまな経験を有した教員が、看護の基礎分野や母性看護学で学んだ内容を基に、女性の健康・妊娠・出産の関連する助産師の活動を中心に教授しています。助産学においては学内講義・演習後、県

内4か所の病院での助産実習・助産所実習・新生児訪問等で実践を通じ助産師としての学習を深めていきます。

また研究において小児看護学分野では、医療的ケアを必要とする子供の在宅ケアに関すること、育児支援に関すること、病気の子供のきょうだいを含む家族の看護に取り組んでいます。母性看護学分野・助産看護学分野では、思春期健康教育・助産師としての技術力向上、国際貢献、助産学教育等に取り組んでいます。少子化の時代、ますます子供と女性、家族の看護が重要となる中で、これらの研究成果は看護専門職の継続教育や高校生へのメディカルトーク、小中学生への思春期教育等社会貢献にも発揮されています。



母性・小児看護学講座メンバー

看護学科 基礎看護学講座

基礎看護学講座は、看護専門分野の基礎となる部分を担当し、看護の基盤となる知識や基本的な看護技術を教授しています。看護技術の学習では、技術のポイントを示した自作の動画教材を活用し、事前学習→講義・演習→実技テストまでの一連の過程を主体的に学習できる環境を準備しています。さらに効果的な技術教育の提供を目指し、ボディメカニクス理解のための教材開発、看護実践能力育成に向けた教育方法等の研究に、講座一丸となって取り組んでいます。

平成19年度より、愛媛県下の看護教員有志による、「看護技術教育検討会」を立ち上げ、現在も看護教育の質の向上に向けた活動を続けています。検討会では、おもに看護技術教育に関する情報の共有や、年ごとの活動テーマに沿った共同研究を行い、その成果を学会等で発表し

ています。また、平成25年度からは愛媛県看護教員継続教育事業として、県下の看護教員を対象とした研修会を企画・運営しています。開催初年度となる平成25年度には、4回シリーズで、より効果的な授業設計の基礎や学生の主体的学習を促す教育方法について学習しました。第1回は夏期に宿泊研修を開催し、第2回はループリック評価に関する研修会を、第3回には研修会での学びを教育実践に活用するためのワークショップを開催しました。また、最終回には、参加者が実践した授業改善の成果報告会を開催しました。

今後も、教員間や学生との交流を通じて、より魅力ある授業を創造し、学生がのびのびと学べる環境を提供していきたいと考えています。



基礎看護学講座メンバー



看護技術教育検討会開催の様子

講座紹介

看護学科 地域・精神看護学講座

地域・精神看護学講座は、「地域・在宅看護学」と「精神看護学」の2領域で構成されています。「地域・在宅看護学」では、病気や障がいをもつ個人や家族が地域でその人らしい生活を送ることができるように、専門職として支援するための教育研究と集団や組織的アプローチによって地域全体の健康を目指す教育研究を行っています。また、「精神看護学」では、精神疾患や障がいの有無に関わらず、広くこころの健康の保持・増進・回復に向けた看護実践が行えるように教育研究を行っています。

本講座における取組みの一つである、「卒業研究ゼミ」をご紹介します。所属教員と卒業研究で指導を受ける学生が定期的に集まり、研究への取り組み状況を共有する相互学習の場として、平成23年度から開催しています。卒業研究や国家試験対策、就職活動など、個人ワー

クが学生生活の中心になりがちな4年生にとって、この卒業研究ゼミは他学生の取り組み状況に刺激を受け、情報交換できる場となり、孤立感の軽減にもつながっています。また、教員にとってもオープンな研究指導の機会でもあり、多くの専門家の意見を聴かせてもらいながら指導に反映できる貴重な場となっています。平成25年度は、このゼミに参加した学生の松浦生輝さん（26年4月から看護師として県内病院に勤務）が演題『地域で暮らす精神障害者がスポーツ活動「フットサル」へ参加する体験の意味』を四国公衆衛生学会で発表し、フロアと意見交換できました。このように、学生と教員とが密に双方向のやり取りをしつつ、毎年の評価を踏まえた改善を図りながら、将来の看護職の学びを支援しています。



臨床検査学科 生体情報学講座

生体情報学講座には現在7名の教員が所属しています。各教員の専門分野は様々ですが、私たちの講座では、主に以下のようなことについて講義および実習を担当しています。

- 1) 血液等の検体について生化学的・遺伝子工学的手法で成分を測定・解析し病気の診断に役立てる「臨床化学検査学」「遺伝子検査学」、およびそれを学ぶ基礎となるヒトの身体を構成しているタンパク質、脂質や核酸などの構造と働きについて学ぶ「生化学」「分子生物学」「ヒトの遺伝学」。
- 2) 顕微鏡等を用いて、白血病やがんを細胞の形態で診断する方法について学ぶ「臨床血液学」「病理組織細胞学」、およびそれを学ぶ基礎となる「血液学」「病理学」。
- 3) これらの検査で得られた結果やその他の検査で得られた情報を総合的に判断し、病気の診断を行うことが出来る能力を身につける「医学検査診断学」、およ

びそれを学ぶために必須の様々な疾患や病気の人の体内で起きている病態について学ぶ「臨床病態学」。

また、これらの専門科目には講義以外に学内実習が設けられており、講義で学んだ内容を実際にも実験することでさらに理解を深めます。

研究面では、教員の研究テーマは多岐にわたっていますが、「癌の診断に関する研究」では、新しい手法であるLBC（液状化検体細胞診）法を用いた癌の形態的診断法や遺伝子診断法の開発を行っています。また、「骨粗鬆症に関する研究」では、肥満によって引き起こされる骨量低下に対する抗肥満物質の効果について研究し、「環境ホルモンに関する研究」ではプラスチック製の食器や乳瓶の材料に含まれるビスフェノールAという物質が肥満症や行動異常に与える影響についての研究を行っています。それ以外にも、検査の精度管理や実験動物における血圧計の使用方法などについても研究を行っています。

授業PR

在宅看護論実習

地域・精神看護学講座

窪田 静 准教授

～病棟看護師が病院の中で実践すべき在宅看護～

この実習のきっかけは、私が初めて卒業研究で担当した学生の想いの中にありました。「不安でいっぱい退院した患者さん。在宅の実習で見たのは笑顔だった。そこには何があったの？」

退院の時から笑顔にするにはどうすればいいの？」

この認識のもと、21年カリキュラム改訂で2週間と倍増した在宅看護論実習の後半の舞台を、全国に先駆けて「療養支援ナース」を創設した松山赤十字病院の中に移しました。退院後の療養生活への病棟看護師による意志決定支援である「退院支援」と、その具体化である「退院調整」。入院前の「前方連携」や、がん・難病・認知症・透析という苦難を背負った通院患者への外来看護。これらを参与観察させて頂き、得た「気づき」をカードに記していきます。

前半の訪問看護実習は黄色、病棟はピンク、外来は緑。3つを統合し、グループに分かれて

「発想法」でカテゴリー化して図示。最終日にご指導頂いた方々の前で発表すると、訪問看護師と病院看護師に通じる想いとスキル、自宅生活する利用者と入院患者さんが共に大切にしていること… それらが色の重なりの中に見えてきます。そして最後に学生達は、2週間の実習を通して、病院の中でなぜ在宅看護を実践していくべきなのか、まだ発展途上のその課題に對峙する自己を見つめます。

多くの患者さん、ご家族、そして在宅ケアの従事者が、長い間この問題にぶつかり、悩んできました。多忙な病棟業務の中、労力を費やして行っている退院指導。これが真に実を結ぶことなしに、今や国是となっている在院日数短縮も、在宅ケア推進も実現することはありません。本学の在宅看護論実習は、退院支援の伝道師と呼ばれる宇都宮宏子氏も注目して下さる、最先端の課題に挑む実習なのです。



「発想法」発表会

地域に開かれた大学づくり 地域交流センター事業

地域の皆様や県内の保健医療関係者と交流・連携して、大学が有する知識・技術を社会に還元します。健康・医療に関するトピックや看護・介護の技術に関する公開講座、親子体験講座、砥部町内のグループや教育機関へ出張講座を行います。

平成26年度活動予定（抜粋です。くわしくは大学のホームページをご覧ください）

人材育成 (専門職)	卒業生と在校生の交流事業「ホームカミングデー」	5月10日、7月5日
	看護実践研究セミナー セミナーⅠ・Ⅱ	8月11日、8月18～19日
	地域と学校が連携して進める思春期の健康づくり事業	7月と3月の2回(予定)
人材育成 (一般)	砥部子育て広場 NPO法人とべぽっかぽか協力事業	5月11日
	看護師と臨床検査技師の「お仕事体験」 NPO法人とべぽっかぽか協力事業	6月29日
	夏休みキッズひろば NPO法人とべぽっかぽか協力事業	8月7日
	高校出張講座／メディカルトーク	6月～8月
	高校生の生命科学体験プログラム	8月(予定)
	看護師と臨床検査技師の「お仕事体験」 NPO法人ラ・ファミリエ協力事業	8月24日(予定)
	おもしろ理科教室（学生祭）	10月25～26日
人材育成 (学生)	学生ボランティア登録と活用	常時
	リレーフォーライフ2014	11月1～2日
調 査	愛媛県看護職員需給見通し策定に係る調査研究	9月(予定)

平成25年度活動の一部を紹介します

科学で身につける災害に立ち向かえる力と心

（科学技術コミュニケーション推進事業）

自然災害にあった時には、自ら立ち向かえる基礎的な力が必要です。自然を理解しそれに向き合える心、社会で現在使われている科学技術を理解し選択・活用できる心、そして、自分の気持ちを表現・解放出来る手法を、科学を通して身につける教室を開催しました。小中学生と保護者を対象とした7回の科学教室です。延べ参加者数は134名で、アンケート調査の結果、好評を得ました。

企画・実施担当（佐川・加藤・相原）



図書館紹介

利用案内・東日本大震災写真展・ブックハンティング

専門員（司書） 泉 浩

本学の図書館は、一人当たりの貸出数が非常に多く、よく利用されている図書館です。特に授業での課題解決、研究活動、実習の準備、国家試験対策等での利用が多く、貸出が集中すると資料が足りなくなることもあります。しかし図書館の持つ様々な機能を理解し、活用している学生はあまりいないのではないのでしょうか。そこで図書館の便利な使い方を知ってもらうため、図書館の機能やサービスを紹介したいと思います。

図書館の蔵書数約7万冊のうち半数以上を医学・看護学の専門書で占めています。特に看護学は県内随一の蔵書数で各地から問い合わせがあります。雑誌は購入分だけで80種、寄贈分も含めると年間400種以上受け入れています。バックナンバーも所蔵していますが、雑誌は貸出できませんので館内で閲覧するか、必要な部分を複写してください。新聞は全国紙5紙、地方紙1紙、英語新聞1紙を受け入れており、全国紙と英語新聞は1年間、地方紙は3年間保存しています。図書や雑誌・新聞は書庫にも所蔵していますので、書庫の資料を閲覧したい時には、カウンターへおこしてください。

必要な資料が貸出中の場合は予約、資料を所蔵していない場合はリクエストしてください。予約用紙はカウンターにあります。予約は返却され次第本人に連絡します。リクエストは購入するか他の図書館から取り寄せることで、可能な限り希望に添えたい

と考えています。また昨年からブックハンティングをはじめました。図書館に置きたい本がある人は、ぜひブックハンティングに参加してください。一緒に図書館の本を選びましょう。

学内で利用できる電子ジャーナル・データベースは年々増加しています。昨年度は新たに『Science』が加わりました。必要な文献をデータベースで検索し、電子ジャーナルから無料で入手できる環境が整っています。またノートパソコンの貸出も行なっていますので活用してください。

必要な文献を電子ジャーナルや図書館で入手できない場合は、他の大学等から取り寄せます。お気軽にカウンターでご相談ください。ネットワーク化された全国の大学図書館、国立国会図書館等から必要な資料を探しお渡しします（有料）。

図書館では、もっと図書館を利用してもらいたい、読書を楽しんでももらいたいとの思いから、展示に力を入れています。定例のガラスケース展示のほか、昨年度は「東日本大震災写真展」や「絵本原画展」を開催しました。またリサイクルコーナーを設置し、資料の再活用を図っています。今年度からは学内者限定で土曜日開館をスタートしました。

私の学生時代は多くの本を読むことで見識が高まりました。学生のみなさんもできるだけ多くの本を読み、豊かな人生を送って欲しいと切に願っています。



東日本大震災写真展

Information

【インフォメーション】

図書館利用案内 《学外の皆さんへ》

休館日 土日・祝日 12月28日～1月4日 蔵書点検期間 メンテナンスなど

利用時間 9:00～18:30（入館の際は、受付まで）

館内閲覧 自由にどうぞ。図書、雑誌、新聞、ビデオなどがあります。

館外貸出 登録制で、本学卒業生、医療関係機関にお勤めの方などの制限があります。登録の際には身分証明書（現住所が確認できるもの）が必要です。貸出冊数と期間は、3冊2週間です。

図書返却 図書を返却するときには、「図書貸出券」は不要です。
閉館時には、事務棟入口のブックポストにお返しください。

コピー 館内のコピー機でコピー可能。但し著作権法で許可された範囲内でのコピーとなります。コピー受付は18:00までとなっております。コピー代金は有料（1枚10円）小銭を用意してください。

蔵書検索 図書館のホームページをご利用ください。

文献検索 学生・教職員専用のみ 学外の方は、文献検索を済ませてお越しください。

平成26年度 学年暦

4月 3日 入学式 4日～ 前期授業 23日 交通安全講習会	5月 30日 犯罪被害防止教室	6月 20日 開学記念日	7月 5日 ホームカミングデー 9日 情報セキュリティ啓発セミナー 30日～8月5日 前期試験	8月 9～10日 オープンキャンパス	9月 20日 助産学専攻科推薦入試（本学枠） 20日 大学院 一般入試・社会人特別選抜入試
10月 1日～ 後期授業 25～26日 学生祭	11月 15日 推薦入試 15日 社会人特別選抜入試 16日 助産学専攻科推薦入試（県内枠）・一般入試	12月 25日～1月4日 冬季休業	1月 17～18日 大学入試センター試験	2月 4～10日 後期試験 25～26日 一般入試：前期日程	3月 12日 一般入試：後期日程 19日 卒業式 20日～ 春季休業

広報誌「砥礪(しれい)」についての意味

『砥礪(しれい)』とは、「①砥石(といし)②とぎみがくこと」とあり、さらに「学問、修養などを高めようと努力すること【大辞泉：小学館】」などの意味があります。平成16年に大学が開学して1年経った平成17年に、本学の位置する砥部町にちなむとともに、大学広報誌の名称としてふさわしいということで多くの賛同を得て決定しました。

公立大学法人 愛媛県立医療技術大学

〒791-2101 愛媛県伊予郡砥部町高尾田543番地
TEL 089-958-2111 FAX 089-958-2177
ホームページ <http://www.epu.ac.jp/>



【アクセスマップ】

